

Toyota City Museum
Of
Local History

豊田市 郷土資料館だより

No.114
最終号

目次

ありがとう郷土資料館 ようこそ新博物館へ 2	
展示会の思い出 3-5	
・平成2年度特別展 又日庵展 牧野義雄展 わずか1日違いで2つの特別展を開催！	
・特別展「夢・富くじ 宝くじ」の思い出	
・平成14年度特別展「川をめぐるくらし」 体験と取材による展示の試み	
・平成17年度特別展「鈴木正三—その人と心—」 忘れられない赤飯のおにぎり	
・平成29年度企画展「とよたの芸者さん」の思い出	
・平成30年度特別展「すすめ！タイム川ペラー ～とよたの川へ時間旅行～」の思い出	
豊田市郷土資料館だより記事一覧 6・7	
堀の水ぜんぶ抜く—松平東照宮の堀と石垣— 8・9	
姿を現した明治用水旧頭首工 10	
民具調査だより35 民具調査だより12年 11	
新博物館開館のお知らせ／ 豊田市郷土資料館・近代の産業とくらし 発見館閉館のお知らせ 12	



〈豊田市郷土資料館〉



〈近代の産業とくらし発見館〉

ありがとう郷土資料館 ようこそ新博物館へ

豊田市郷土資料館の開館

昭和42年(1967)1月の開館のきっかけとなったのは、昭和38年の豊田大塚古墳の発掘調査でした。6世紀前半の西三河の英雄であった王の墓から、装飾須恵器をはじめとする貴重な副葬品が続々と出土したのです。これらを国に買い上げられることなく地元の宝として守り伝えるために、豊田市は総工費1200万円をかけて郷土資料館を開館させました。周辺自治体よりもいち早く設置された資料館であったことから、当時は数多くの視察があったと言います。

郷土資料館開館当時は、日本の総人口が1億人を突破し、高度経済成長期の真っただ中。昭和41年に登場した初代カローラが車社会を加速させ、ボウリングやミニスカートが大流行した頃です。豊田市は自動車産業を中心に発展してきたまちですが、昭和41年の総合計画で「産業文化都市」という言葉を掲げ、昭和48年までに郷土資料館・青年センター・図書館・体育館・青少年キャンプ場・視聴覚ライブラリーなどの文化施設を開設しました。歴史・文化への取り組みを続けたこの頃の豊田市のあゆみは、現在の「WE LOVE とよた」の取り組みに通じています。その先陣を切ったのが、郷土資料館であったことを誇らしく思います。

活動への想い

高校日本史の教科書に登場する豊田市のモノ・コトは、豊田大塚古墳の須恵器(写真)、有名な長興寺の織田信長像、社会に衝撃を与えた加茂一揆、そしてトヨタ自動車の4つです。郷土資料館では、こうした有名な歴史のみならず、さまざまな魅力や宝の原石を掘り起こし、本市の歴史を豊かにしてきたと思います。

豊田市郷土資料館は、文化財行政と密接に関わってきました。この両者の活動には、短距離走者の瞬発力をもった熱意と、長距離走者の粘り強い持久力が必要で、それによって歴史が掘り起こされたり、守り伝えられたりした時に、市民の皆さんが喜ぶ姿を見たときの嬉しさは格別です。文化財行政に関わった時間の方がうんと長い私自身も、特別展に関われたときには全力で取り組みました。平成4年(1992)の「拳母藩内藤家展」は、内藤家の歴史を通覧できる展示と図録の完成を目指しました。平成9年の「キミは杉浦を

見たか」では、拳母高校(現・豊田西高校)出身の大投手杉浦忠さんを紹介。昭和34年に38勝4敗の力投で南海ホークス(現・ソフトバンクホークス)を優勝に導き、日本シリーズでは盟友長嶋茂雄を擁する巨人と対決。4試合37イニングのうち32イニングを一人で投げ抜き、空前絶後の4連投4連勝を成し遂げた大エースの姿に、その年、市名変更や伊勢湾台風を経験した豊田市民は酔いしれました。「球界の紳士」と呼ばれた大先輩の生の姿を知って欲しい気持ちでいっぱいでした。平成25年の「明治の傑人岸田吟香」は、幕末から明治期に和英辞書・新聞発行・目録など、日本初をいくつも成し遂げた拳母藩士を取り上げました。もとはと言えば、「拳母藩内藤家展」の時に、

そのけた外れの人間力にすっかり魅了され、20年にわたり少しずつ資料を集めてきたものです。明治の人のエネルギーをもった吟香の姿は、全国に大きな反響を呼びました。

豊田市には歴史や文化がないと、今でも揶揄されることがあります。確かに昭和13年にトヨタ自動車の拳母工場ができてからのまちの発展が、現在の豊田市の大枠をつくったことは間違いありません。ただ、それは80数年前の出来事で、その前に1年以上にわたる豊かな歴史や自然が育まれてきたことも忘れてはなりません。郷土資料館の展覧会や図録には、こんな歴史や物

語があったということ伝えたい、知ってもらいたい、自慢して欲しいという想いが詰め込まれていた気がします。それを見た人が、歴史や物語を知ってその土地に興味をもち、そこに住むことが面白くなれたとしたら、学芸員にとっては望外の喜びです。

ようこそ、新しい博物館へ

運営してきた私たちや先輩たち、そして何よりも市民の皆さんの55年間の思い出が詰まった郷土資料館は、令和4年9月で活動を終わりますが、その後を引き継ぎ、さらに活動領域を広げる新しい博物館が、令和6年に開館します。豊田市の歴史や自然を基軸に、日本・世界・宇宙までを射程に入れて、現在を見つめ、未来を考える拠り所となる。市民の皆さんと「みんなでつくりつづける」博物館は、本市に息づく豊かな歴史や自然を受け継ぎ、みんなで「とよた」を楽しみながら、このまちが未来へ進むための底力を育み、人とまちの未来を共につくっていきます。(森泰通)



展覧会の思い出

Thank you for 55 years



平成2年度特別展 又日庵展 牧野義雄展 わずか1日違いで2つの特別展を開催！

平成2年（1990）に開催された特別展「又日庵展」と「牧野義雄展」は、開始日が1日ずれているだけ、しかも、どちらも展示図録を発行し、ビッグネームの来賓を迎えたイベントもあるというハードな事業でした。市制40周年記念の年で、様々な分野の著名人100余人が集う「日本デザイン会議'90 豊田」という大規模な文化イベントにあわせた展示でした。

資料館を会場に9月11日から開催された「又日庵展」は、寺部渡邊家の10代当主渡邊規綱の茶人としての一面を伝える展示。実弟が茶道裏千家の11代千室^{ちんげん}・玄々斎であることから、当時の裏千家の家元鵬雲斎宗匠（現・千玄室大宗匠）が来館されました。また同日に「又日庵顕彰茶会」が守綱寺で開催され、家元が本堂で渡邊家の先祖に献茶されるということで、家元のお点前を直接見られる機会とあって、大勢の人が守綱寺に詰めかけました。一方、私たち職員は又日庵展の開会式を終えるとすぐに「牧野義雄展」の会場である駅前^{駅前}の商業施設に向かい、展示作業を行いました。翌12日、会場の商業施設の



オープン前に開会式を終えなくてはならず、スケジュール管理が大変であったことを思い出します。開会式は前駐日英国大使やオックスフォード大学トリニティカレッジの学長も出席するという特別なもので、前駐日英国大使サー・ヒューコータッチ氏の講演会も開催され、日英文化交流に寄与した人物として牧野義雄が紹介されました。その後、牧野が描いたオックスフォード大学ボドリアン図書館とも資料交換をするなど今も交流が続き、豊田市にとっても記念碑的な展覧会であったと思います。豊田市美術館開館前のことで、郷土資料館は市内唯一の展示施設として、現在とは違った役割も担っていました。（伊藤智子）

特別展 「夢・富くじ 宝くじ」の思い出

平成6年（1994）秋に開催した特別展で、私が初めて担当した展覧会です。きっかけは、災害で破損した社殿の修復資金を得るため、東京の湯島天神などで猿投神社の神宮寺が催した「富くじ」興行の資料を紹介することでした。

資料調査をすると、関連資料が少なかつたため、全国の富くじから現代の宝くじまでを扱うこととしました。

観覧者数は多くはありませんでしたが、開催後にマスコミなどから問合せがあり、活用されました。さらに「猿投神社富興行資料」を市の有形民俗文化財に指定することができました。

私は、昭和63年（1988）に入庁し、平成4年（1992）から増築された郷土資料館（文化財保護課）に異動しました。行政職事務の採用でしたが、博物館学芸員の資格があり、学生時代に遺跡の発掘調査の経験があったことからの異動でしょうか。

美術館建設のため、拳母城跡（七州城跡）の発掘調査に平成4年（1992）から1年間従事し、文化財保護の業務とともに展覧会も担当しました。

今思うと、展覧会の図録の編集や写真撮影は大変でした。当時はワープロで文字を打ち、写真や図版はコピー機で拡大縮小して、原稿用紙に貼り編集をしました。写真撮影は大型カメラでフィルムでの撮影。まだデジカメがなかった

ので、その場で出来上がりが分からず、35ミリカメラでの撮影も同時に行ったものの失敗し撮り直したことも。

平成11年（1999）の異動で郷土資料館を離れ、平成17年から民芸館での仕事は、郷土資料館での経験が大いに役立ちました。平成31年（2019）には郷土資料館（文化財課）に戻り、美術館北側の拳母城跡（七州城跡）であった新博物館の建設に携わっています。

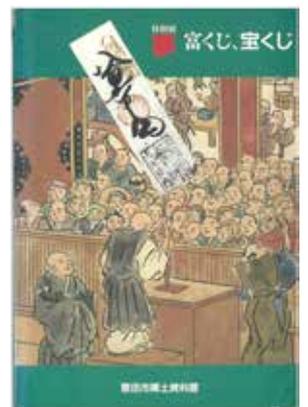
自分には専門といえる分野がありません。大学の先生からも専門のない学芸員は教育普及に係る仕事を頑張るんだといわれました。採用時の面接でもそのとおり答えました。このため「わかりやすい」展示などを心がけてきました。

上司から展覧会を行うときは、社長のつもりで事業をすすめるようにとアドバイスを受け、なりきるよう努めました。

新博物館への移行準備のため、9月末で郷土資料館は閉館します。

私より1才年下の郷土資料館へ
「長い間ありがとう」

（児玉文彦）



平成 14 年度特別展

「川をめぐるくらし」体験と取材による展示の試み

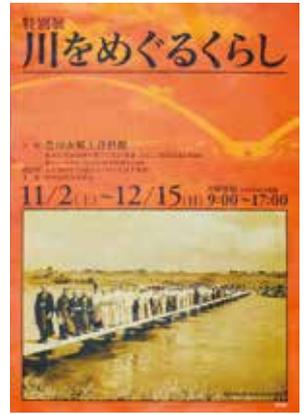
古文書や記録類を主に扱う歴史分野の人間にとって、そこに書かれている事柄などを実際に試してみる機会はないのですが、平成 14 年（2002）に開催された特別展「川をめぐるくらし」では、それが実現しました。江戸時代の挙母藩内藤家が、矢作川の鮎を塩漬けにして将軍家まで届けたという歴史を紹介するにあたり、内藤家文書にあった塩漬け鮎の作り方の記録に基づいて実際に作成してみたというものです。矢作川の新鮮な鮎を用意し、古文書にある桶や献上用の化粧箱も準備して当時の人とできるだけ同じ方法を試し、作成過程の写真も展示紹介しました。

この展示は専門分野の異なる学芸員が「矢作川」をテーマに、人々が川をどのように利用してきたか、川からの恵みをどのように享受してきたか、災害との闘いの歴史、信仰や年中行事を紹介する展示でした。当時としては珍しく、文字資料からわかる歴史だけでなく、現在の生活の中にも受け継がれることから、市民から教わったり、直接取材したりしました。

具体例としては築漁（観光築）を行う広瀬築を運営する組合にご協力いただき、竹を切りだして蛇籠を作る段階から、築の製作過程を記録しました。時間のかかる調査では

ありましたが、未来へ残す記録としての役割も持った調査であったと思います。

さて、塩漬けにした鮎はどうしたか？ もちろん食べました。しかし江戸時代の人がどのように食べたのか記録はなく、最初はシンプルに焼いて食べたのですが、塩抜きの方法が下手で美味しくなかった記憶があります。その後、料理人の方に塩抜きの方法を伺い、雑炊を作ってもらい、内覧会時には美味しく試食することができました。冷蔵庫のなかった江戸時代の人にとっては塩漬けの食材を料理する方法は当たり前で、わざわざ記録することではなかったのでしょうか。実際に体験し、多くの人と関わり、教えてもらうことで展示に活かされた成果は勿論のこと、市民の方にも興味を持ってもらうことができる展示でした。令和 3 年、およそ 20 年ぶりに塩鮎を再現してみました（はくぶつ Chan # 1 参照）。矢作川の鮎、今後、新しい博物館で毎年作られる名物になるとよいですね。（伊藤智子）



平成 17 年度特別展

「鈴木正三 — その人と心 — 」忘れられない赤飯のおにぎり

平成 17 年（2005）は、江戸時代の僧・鈴木正三没後 350 年の記念の年。6 月 25 日の命日にあわせて、特別展と記念事業の開催が前年度から準備されていました。没後 350 年は、ちょうど豊田市と周辺 6 町村との合併の時期（4 月 1 日）と重なり、旧足助町出身の正三の展示は、様々な立場の人が自治体を超えて関わった事業となりました。展示の他に、直木賞作家・長部日出雄氏の基調講演とシンポジウム、能「ヲモカゲ小町」（正三作）の上演、オリジナル合唱組曲「鈴木正三物語」の製作と、ゆかりの地・熊本県天草市（当時は本渡市）の本町小学校と市内の矢並小学校・則定小学校の子どもたちによる発表などが実施されました。

華やかなイベントが予定される中、特別展は、長年旧足助町を中心に行われてきた学術研究の実績や研究者とのつながりをもとに構成すること、展示資料の所蔵先が、北は宮城県仙台市から南は熊本県天草市と広範囲に及び、資料調査の段階から大変さが予想されました。しかし最も苦労したのは展示内容で、モノの展示では、その思想や教えがわからず、正三の偉大さが理解されないのではないかと、いった点でした。また、この展示で期待されたことのひとつに「各地にある正三像を集める」ことがありました。市内にある指定文化財の恩真寺蔵、心月院蔵の他、東京都八王子市長泉寺蔵（八王子市指定文化財）、滋賀県彦根市報

慈寺蔵、大分県大分市能仁寺蔵の 5 体の公開です。展示施設を持たなかった旧足助町時代にはかなわなかった展覧会の開催に、人々の期待も大きかったのだと思います。最も難関の八王子市へは当時の課長と先輩学芸員が、彦根市と大分市へは私が出張しました。その大分市能仁寺では、正三和尚ゆかりの地から来たとい

うことで、檀家の方々に前にその事績や没後 350 年記念事業の話之急遽することになり、冷や汗をかきました。このお寺の方々は、その後、正三像借用の際に、旅立つ和尚の門出として、赤飯のおにぎりを渡してくれたことを覚えています。それは、私たちが普段見慣れた赤飯と違い、金時豆サイズの赤い豆がゴロゴロ入った、大きなおにぎりでした。

天草・島原の乱以降の復興のために多くの寺を建てた正三を偉人として慕う人々が今も多く、鈴木神社や「鈴木さま」として祀られる小さな祠もあるのです。熊本・天草での調査活動は、当時の本渡市歴史民俗資料館の方や、多くの人に支えられての展覧会。この展示を振り返る時、「鈴木正三」の心は受け継がれていると思ひ出されます。

（伊藤智子）



平成 29 年度企画展 「とよたの芸者さん」の思い出

学芸員として、自身の研究テーマで展示ができるということは、なかなかない経験だと思います。しかも、私の大学・大学院での研究テーマは「近代の花街」。煌びやかなイメージがある一方で、働く女性（芸妓・娼妓）からの搾取という人権問題も抱える花街は、展示として取り上げるには難しいテーマです。

どのような切り口の展示とするか悩みましたが、「まちの賑わいと芸者」をひとつのテーマとすることにしました。昭和初期に拳母の芸者が「拳母音頭」を発表し、不況にあったまちを元気づけたこと、戦後に足助の芸者が香嵐溪の宣伝のため名古屋で踊りを披露したこと、お座敷の文化など、芸者はまちの賑わいに一役買っていたと言えるからです。

しかし、そのような芸者の明るい側面だけではなく、経済面での苦勞や周囲からの偏見にさらされたことなど辛い側面も紹介し、芸事のプロ、接待のプロである芸者の生き方を伝えたいと思っていました。

展覧会の準備は、花街・芸者に関する情報を集めることから始まりました。料理屋への聞き取りや、口コミで関係者を探して資料を収集していましたが、新聞に情報提供を呼びかける記事を掲載してもらえたことから、置屋のお孫さんなどから当時の写真の提供を受け、話を聞くことができました。

芸者をされていた方、子どもの頃に検番でよく芸者と話をしていたという方、料理屋の女将、置屋の女将のお孫さんな

平成30年度特別展 「すすめ！タイム川ベラー ～とよたの川へ時間旅行～」の思い出

私が担当した、初めての特別展。それが「すすめ！タイム川ベラー～とよたの川へ時間旅行～」でした。平成 14 年（2002）以来の、川を主役にした展覧会。新しい博物館を見据えて、川に関わる自然・歴史、そして人の暮らしが見える展示をしようと意気込んだ記憶があります。

まずは、展示構成から考えました。豊田市内の川の基本情報は？ 川にはどんな生き物が棲んでいるんだろう？ 川の歴史って？ 川で何ができるんだろう？ これからの川ってどうなるんだろう？ 私自身が疑問に思っていることを思い浮かべながら、展示構成・展示資料を想定していきました。

特別展の期間が年明け 1 月からだったので、夏の間だけ調査ができるかが肝でした。川へ行き、ウナギを釣ってもらおうとしたら、大きなナマズが釣れてしまったり、網を張るところを撮影しようと胴長を履いて川へ入ったら、水深が思ったより深く、カメラと私が水没しそうになったり……。大変な思いもしましたが、川のうまいものをたくさん食べることができ、美味しい思い出ができました。

資料がだんだん集まってきた頃のこと、この年には、様々な場所へ新博物館 PR に出かけていました。そのひとつで、実際に生きている魚をスケッチしてもらうイベントを行ったところ、子どもたちにも大変好評でした。

「そうだ！ 資料館に水族館を作ろう！」と思い立ち、市

ど、多くの方に聞き取りを行い、少しずつ昭和 30 年代以降の市域の花街の様子が明らかになってきました。

私が展示をつくる上でいつも心がけているのは、「人が見える展示」にするということです。資料を紹介するだけでなく、その資料に関わる人が生き生きと見えるようにしたいと思っています。この展覧会でも、展示した三味線などを使っていた芸者や、写真に登場する芸者たちの名前・ニックネーム、エピソードを紹介し、彼女たちを身近に感じてもらえるようにしました。また、聞き取った内容も、その方の語り方を活かした文章で紹介しました。

会場では、料理屋・置屋の場所を示した当時の地図や写真を見ながら、昔を懐かしむ来場者の姿を度々目にしました。今は見られない、まちの賑わいの一面を紹介できたと思います。

この展覧会を機に、県内の民俗学関係の研究会や地方史研究会のほか、卒業した大学院や、女性史関係の研究会でも豊田市の芸者について報告する機会を得て、このテーマで研究を続けていきたいという思いを新たにすることもできました。

新しい博物館で、「あいちの芸者さん」展を行うのが夢です。
(山田佳美)

内の団体である「矢作川水族館」さんの協力を得て、資料館ロビーに大きな水槽を 2 つ並べました。ひとつには、体長 1 m を超える大ウナギ、もうひとつには、オイカワやカワムツ、ドンコなどの色々な種類の魚を観察できるようにしました。

展示室内の展示は、真ん中の広いスペースに 10 m 程の鮎釣り船を展示し、実際に船の上で釣りをしている様子を再現したり、投網を天井から垂らして、広がる様子を観察できるようにするなど、工夫しました。同時に、川に関わる方々の、様々な聞き取り結果も展示したことで、モノだけではなく、ヒトも感じられる展示になったのではないかと思います。川の隣に住み、毎日川を見ながら暮らしている人、ダム建設で移住をした人、川魚の料理人、テンカラ釣りの名人…たくさんの方々のおかげで完成した展示でした。

さて、新しい博物館には、水槽が設置されて、いつでも川に棲む魚たちが観察できるようになる予定です。次、もし川の展示をするのであれば、築を博物館に作って、それを見ながら鮎料理が食べられるようにしたいなあと思うのでした。

(名和奈美)



豊田市郷土資料館だより 記事一覧

No.1 ~ 100 の記事一覧は、資料館だより No.100 に掲載しています。

資料館ホームページで過去のたよりをご覧いただけます。

(QRコードは令和5年3月31日まで)



No.101

平成30年
7月発行

企画展「みんなであつめた災害の記憶—江戸時代から現代まで—」

平成29年度 文化財保護事業報告

平成29年度 郷土資料館事業報告

とよた歴史マイスター活動報告

前田公園のモニュメント跡

平成30年度 特別展準備レポート①～川で魚をとる！広瀬やなの場合～

足助の商家・民具調査報告書発刊！

No.102

平成30年
9月発行

豊田市郷土資料館 新博物館 PR プロジェクト活動中！！

重要文化財旧鈴木家住宅修理現場からの報告①～旦過寮のナゾ～

平成30年度 特別展準備レポート②～川で魚をとる！広瀬やなの場合～

勘八峡へ墜ちてきた全日空機

民具調査だより 26 斧と鉞

企画展「みんなであつめた災害の記憶—江戸時代から現代まで—」後記

No.103

平成30年
12月発行

豊田市指定文化財 猿投神社木造千手観音菩薩立像の平成修理を終えて

特別展「すすめ！タイム川ベラー～とよたの川へ時間旅行～」

校庭の隅で静かに見守る「菅沼邦三郎先生之碑」

博物館の種

新収蔵資料紹介 幕府から渡辺家への書状

埋蔵文化財調査速報 神明遺跡第13次発掘調査

民具調査だより 27 鉄瓶

企画展紹介 古い道具と昔の暮らし 物語と民具

No.104

令和元年
7月発行

企画展 山の上の緑の学校—七州城から私たちの学び舎、そして博物館へ—

豊田市教育自主研究グループ（社会科）と豊田市郷土資料館の連携展示 企画展「縄文人はグルメだった!?」を終えて

修復記念特別公開「よみがえる織田信長像」後記

平成30年度 文化財保護事業報告

平成30年度 郷土資料館事業報告

先人の想いが眠る 枝下用水 旧取水口跡

祭り歳時記～とよたの狸々～

No.105

令和元年
9月発行

企画展「猪・鹿・カモ!?」～豊田に棲む3つのシシたち～

有害鳥獣駆除の実際

国指定重要文化財旧鈴木家住宅保存修理現場からの報告②～文化財建造物を彩る「大津壁」とは!?～

令和元年度 特別展準備レポート 神坂峠に見る山への畏怖と畏敬

民具調査だより 28 猪口

新収蔵資料紹介 昭和の大投手 杉浦忠 関係資料

No.106

令和元年
12月発行

特別展 猿投山—祈る山、観る山、登る山—

名と銘

新選組の安藤早太郎は拳母藩士だった！

博物館を活用した授業づくり～長篠合戦図屏風・火縄銃のレプリカの活用を通して～

「とよたの歴史や文化財を学び、伝える」 とよた歴史マイスター 2019

企画展紹介 ーくらしのうつりかわりー 『食べものと道具』

民具調査だより 29 蒸し竈

新収蔵資料紹介番外編 市内の自然系資料の調査を進めています

No.107令和2年
7月発行

トレイルカメラで大調査！～カメラが捉えた自然観察の森の動物たち～

猿投神社 山中観音堂

できなかった企画展「縄文ライフ！～SDGsの種を探しに～」のこれまでとこれから

令和元年度 文化財保護事業報告

令和元年度 郷土資料館事業報告

記憶をつなぐ博物館～（仮称）豊田市博物館における取組～

No.108令和2年
9月発行

拳母城の面影

川原宮謁磐神社

企画展「スペイン風邪とコロナウイルス」見どころ紹介

100年前の危機 学校を襲ったスペイン風邪～企画展「スペイン風邪とコロナウイルス」より～

拳母神社の茅の輪くぐり

民具調査だより 30 鐘馗さん

旧豊田東高等学校で生物調査を行っています

No.109令和2年
12月発行令和2年度特別展 渡邊半蔵家
—徳川を支えた忠義の槍—への誘い

又日庵の湯治

民具調査だより 31 豆粕削り機

♀縄文人の♥結婚相手♂—下切町 大砂遺跡の唐草文系土器について—

復元された戦国時代の山城、足助城

足助伝統的建造物群保存地区に残る文化財
忘れられた「足助町道路元標」「国産自動車創世期と家族の記憶」
—歯車の技師・若松辰治氏とその家族—

オンライン授業の可能性—博学連携—

省営（国鉄）バスの記憶

No.110令和3年
7月発行

令和3年度企画展「縄文ライフ！～SDGsの種を探しに～」

ビフォーアフター 猿投神社 山中観音堂

斎木環と貴彦—明治初期のジャーナリズムを支えた拳母藩士—

No.110令和3年
7月発行

令和2年度 文化財保護事業報告

令和2年度 郷土資料館事業報告

豊田市内に生息する魚類の展示用標本が完成しました

No.111令和3年
9月発行

足助の町並みが、重伝建地区選定から10年を迎えました！！

民具調査だより 32 軒下しらべ〈重伝建10周年によせて〉

豊田で発見！茅葺き屋根のタイムカプセル

都市の交通・路面電車を支えた近代化遺産の「敷石」

博物館の模型が交流館を巡回！/ 僕らの町の博物館を中学3年生がデザイン！

とよた歴史マイスター活動紹介 第1回拓本づくり開催！

No.112令和3年
12月発行豊田市郷土資料館特別展『新修豊田市史』
通史編刊行記念 はじめてのとよた史 を
開催します

『新修豊田市史』通史編刊行！「市史」から見える地域の姿

遺跡の発掘調査報告書制作中

民具調査だより 33 ハクキンカイロ

子どもたちにわくわくドキドキを！コロナ禍でも学びを止めないリモート学習

[寄稿] 76年前の工場疎開跡を探して

みんなで作る博物館！～自然標本あつめるプロジェクト～

とよたの新しい博物館「はくぶつchan」
配信中**No.113**令和4年
7月発行

最終企画展/昭和47年7月豪雨から50年 土石の川も美田へと

世界を知る楽しさ 松井孝宗さんからいただいたもの

郷土資料館職員の応援業務の記憶
新型コロナ禍の記憶

民具調査だより 34 謎の石臼は、精麦機の搗き臼だった・・・。

令和3年度 文化財保護事業報告

令和3年度 郷土資料館事業報告

とよたの新しい博物館 建築工事が始まり
ました！

堀の水ぜんぶ抜くー松平東照宮の堀と石垣ー

令和4年(2022)4月9・10日に、テレビ東京系の番組「緊急 SOS! 池の水ぜんぶ抜く大作戦スペシャル」の撮影で、松平東照宮の堀の水が抜かれました。5月8日の放送では、外来種がほとんどいない類稀なる環境であることや葵文の軒棧瓦が発見され、話題となりました。

松平東照宮の地

現在の松平東照宮の境内は、もともと江戸時代を通じて交代寄合(所領に住み江戸へ参勤交代を行う家格)の旗本であった松平太郎左衛門家の居館が建つ地でした。

明治維新以降、松平太郎左衛門家は、一時東京へ居を移しますが、明治5年(1872)に松平へ戻り、大正末期に再び東京へ転出するまで過ごしました。その後、昭和2年(1927)に松平の代表者が、当主松平信博から、館跡地・池堀・馬場・裏山一帯を譲り受け、八幡神社及び松平東照宮が新築されました。

その後、昭和47年(1972)には境内地が「松平氏発跡地」として市の史跡に指定され、平成12年(2000)には、境内地は松平氏館跡とされ、高月院、松平城跡、大給城跡とともに初期松平氏に関わる「松平氏遺跡」として国の史跡に指定されています。

松平氏館跡

松平氏館跡は、入口が南面する東西約80m、南北約60mの略方形を示し、堀と石垣が残されています。また、松平東照宮の南を走る市道松平足助線と高月院へ向かう道路の三差路より北東側は、近代以降に新たに敷設された道路であり、松平東照宮と松平足助線を挟んだ向かい側の民有地にも、石組の一部が残されています。

堀と石垣については、関ヶ原合戦後に松平太郎左衛門家7代尚栄が居館を整えたときの遺構

とされています(豊田市教育委員会1977)。しかし、発掘調査は行われておらず、絵図の検討からは、現在みられる堀や石垣の構築時期については明らかになっていません(北村2017)。

堀の水ぜんぶ抜く

さて、実際に水中ポンプで堀の水を抜くと、これまで見えていなかった堀の水面下の石垣が姿を現しました。水面下には1~2石分の石が積み重ねられている状況が明らかとなりました(写真1)。

石垣をよく観察すると、水面下の石と水面上の石には、大きさや加工の程度に違いが見取れます。水面下の石は、大きなものが使われ、形状は不揃いであり、石を割った際の矢穴の痕が残されているものが多いです。水面上の石は、水面下の石と比べて小さく、形状も直方体状によく整えられ、石同士の隙間も少なくなっています。また、石の表面もよく加工がされ、矢穴もほとんど残されていません。

このことから、松平氏館跡の石垣は、

- ・水面下で見られる大きく不揃いな石で構築された時期(I期)
- ・大きな石で作られた石垣を解体し、小さくよく整えられた石で積み直された時期(II期)

の少なくとも2時期があることが明らかとなりました。石の積み方は加工の程度からは、I期は近世前期、II期は近世後期以降の構築である可能性が考えられますが、詳細な時期については不明です。



写真1 水を抜いた後の石垣

堀の形

次に堀の形に注目をします。現在は、境内地の西側と南側に堀が巡ります。

「松平太郎左衛門家旧邸略図 明治 12 年火災焼失以前」(図 2)では、現状と同様に西側と南側に堀が描かれます。また、現状は見られない、南側の堀から東へと回り込む石垣状の描き込みが見られます。この一部が現在民有地で見られる石組である可能性が考えられます。

原本が天和 3 年(1683)頃成立したと推定されている『浅野文庫蔵諸国古城之図』(図 1)中の「三河額田 松平」に松平館跡が描かれており、現状では最も古い関係資料です。ここでは、南東角が内側に屈曲する東に回り込む堀が描かれ、西側の石垣の張り出しは見られません。

もともとの堀の形状については、境内地内での発掘調査が行われていないため不明です。しかし、南側の堀の東面を観察すると(写真 2)、北・南面の石垣と組み合っておらず、現在の東面の石垣は後の時代に築かれたことが明らかです。このことから堀が、現状より東へと広がっていた可能性が考えられるようになりました。

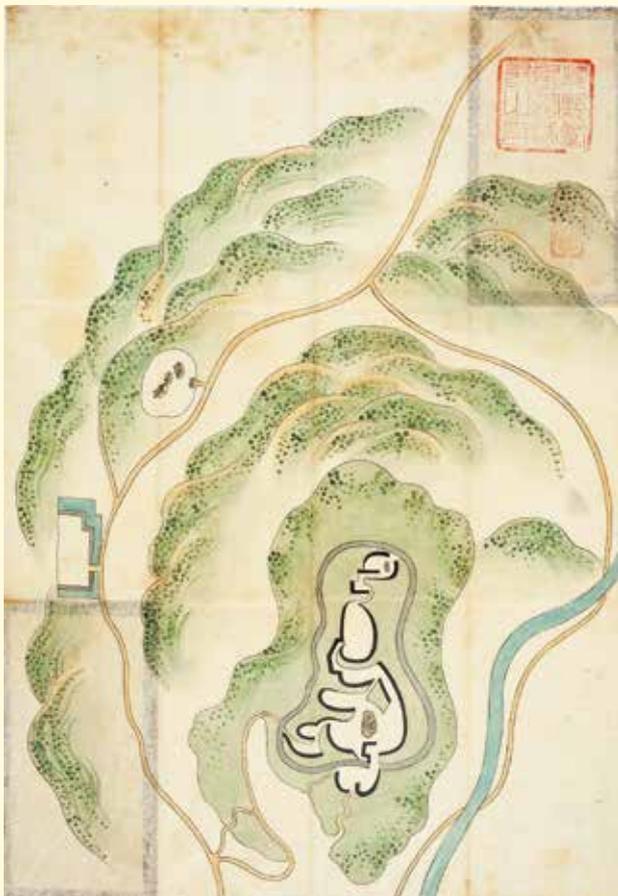


図 1 浅野文庫「諸国古城之図」より「三河額田 松平」
広島市立中央図書館所蔵・提供

おわりに

松平氏館跡について、石垣の構築に 2 時期が想定できることや、堀が東へと広がる可能性など新たな知見を得ることができました。今後も成果が蓄積され、松平氏館跡の変遷が明らかとなることが期待されます。

(市澤泰峰)

参考文献：北村和弘 2017「松平氏館跡」『新修豊田市史 20 資料編考古Ⅲ』新修豊田市史編さん専門委員会
豊田市教育委員会 1977『とよたの文化財』
中根義雄 1984『松平郷松平太郎左衛門家略史』(私家本)

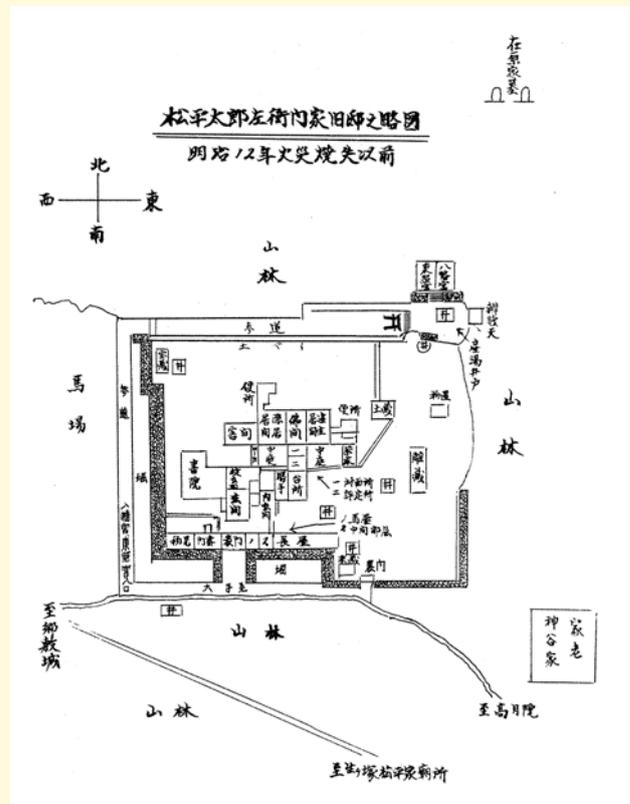


図 2 松平太郎左衛門家旧邸略図(中根 1984 より転載)



写真 2 堀を後から縮小した痕跡(西から撮影)

姿を現した明治用水旧頭首工

令和4年(2022)5月17日に明治用水頭首工で大規模な漏水が発生しました。当初は農業用水や工業用水が取水できず、取水ができるようになってからも制限がかかるなど、長期にわたる影響が続いています。復旧のための懸命な作業が続けられていますが、一日も早い復旧が実現することを切望します。

明治用水頭首工

明治用水は、安城市付近での農業用水等の確保を目的として明治13年(1880)に完成をしました。明治用水の取水施設である、堰堤をはじめとした頭首工はこれまでに、以下の3つが作られました。

- ・ 明治用水の完成時の頭首工
- ・ 明治42年(1909)に、服部長七により人造石を用いて作られた頭首工(旧頭首工)
- ・ 昭和33年(1958)に作られた現在の頭首工

明治42年建設の旧頭首工は、昭和41年(1966)に撤去が試みられました。しかし、人造石があまりに固く大部分の撤去は諦められ、多くの部分が残し、一部が水面上に現れていました。

水中から姿を現した旧頭首工

左岸側の船通しや排砂門、右岸の導水堤の一部は普段から見ることはできましたが、今回の漏水によ

り、普段は大部分が水面下にあった旧頭首工を水面上で観察できる状態となりました。

船通しから下流側に伸びる堰堤や導水堤の下部、頭首工中央に設けられた「筏通し」と呼ばれる部分など、これまでうかがい知ることができなかった旧頭首工の全容を確認することができました。また、排砂門より下流側は、床部分に当たる^{みずた}きも堰堤全長にわたって人造石で構築されている状況も確認できました。

姿を現した旧頭首工を目の前にし、人造石による強固な構造物であったため、想像以上に良好な状態で残る状況や、旧頭首工の規模の大きさと矢作川の水が流れる中で築き上げた苦労を想像し、圧倒されてしまいました。

(市澤泰峰)

参考文献：天野武弘
2005「明治用水の旧頭首工と葭池樋門」『愛知県の近代化遺産』愛知県教育委員会、畔柳武司
2016「明治用水旧頭首工」『新修豊田市史 22 別編建築』新修豊田市史編さん委員会



船通し 手前が下流側



水中から姿を現した明治用水旧頭首工 左手が上流側、手前が右岸、奥が左岸(令和4年5月)

民具調査だより12年



〈貧乏徳利〉

この『豊田市郷土資料館だより』で“民具調査だより”を掲載し始めたのが平成22年(2010)、寅年のことでした。以降この「-35」まで、干支が一巡して12年が経過したことになります。前年から豊田市郷土資料館のお手伝いが始まり、合併後の藤岡、稲武、小原、下山、足助、旭といった地域資料館の民具の再調査と登録作業を行いつつに掲載でした。ファイナルとなりましたので、これまでの報告を振り返ってみたいと思います。

豊田市郷土資料館だより No.74

- No.74 -1 「はねくり備中」平成22年(2010)12月
- No.75 -2 「アンポンタン」平成23年(2011)3月
- No.76 -3 「足踏み脱穀機」平成23年6月
- No.77 -4 「セセリ」平成23年10月
- No.78 -5 「湯たんぽ」平成24年(2012)1月
- No.79 -6 「トクさの龍」平成24年3月



〈トクさの龍〉

- No.80 -7 「煙草盆・蓑盆」平成24年6月
- No.81 -8 「茶壺と茶箱」平成24年9月
- No.82 -9 「釦の硯蓋」平成24年11月
- No.83 -10 「吸入器」平成25年(2013)1月
- No.84 -11 「鉄漿付道具」平成25年6月
- No.85 -12 「あかりの道具」平成25年9月

- No.86 -13 「調査・登録で思うこと」平成25年12月
- No.87 -14 「松魚」平成26年(2014)1月
- No.89 -15 「屋根にあがった鍾馗さん」平成26年9月
- No.90 -16 「時を計る道具」平成27年(2015)1月
- No.91 -17 「土人形(土びな)」平成27年3月
- No.92 -18 「量り売りと貧乏徳利」平成27年7月
- No.93 -19 「鑄掛と焼継」平成27年10月



〈鑄掛屋の道具箱と鞆〉

- No.94 -20 「火熨斗と炭火アイロン」平成28年(2016)1月
- No.95 -21 「春慶塗の折敷と八寸」平成28年6月
- No.96 -22 「荷なう、担ぐ、背負う」平成28年10月
- No.97 -23 「大八車」平成29年(2017)1月
- No.99 -24 「籐と藤」平成29年9月
- No.100 -25 「X脚唐箕」平成29年12月
- No.102 -26 「斧と鉞」平成30年(2018)9月
- No.103 -27 「鉄瓶」平成30年12月
- No.105 -28 「猪口」令和元年(2019)9月
- No.106 -29 「蒸し竈」令和元年12月
- No.108 -30 「鍾馗さん」令和2年(2020)9月
- No.109 -31 「豆粕削り機」令和2年12月
- No.111 -32 「軒下しらべ」令和3年(2021)9月
- No.112 -33 「ハクキンカイロ」令和3年12月
- No.113 -34 「謎の石臼は、精麦機の搗き臼だった」令和4年(2022)7月

以上のような次第になります。記事は発行No.の特集に添わせた内容であったり、発行時期の季節に合わせた道具の紹介も行いました。紹介したものはすべて登録作業の中で出会ったもの達で、筆者に多くの事を学ばせてくれました。

新博物館 開館のお知らせ

豊田市郷土資料館は、令和6年（2024）新しい博物館として生まれ変わります。この博物館では「とよたの自然と人々の営み」をテーマに、豊田市の歴史、文化、自然を幅広く紹介して行く予定です。令和6年1月末ごろにプレオープン、令和6年秋ごろにフルオープンを予定しています。

これまで以上に体験やイベントも開催していきますので、ぜひご期待ください！



豊田市郷土資料館・近代の産業とくらし発見館 閉館のお知らせ

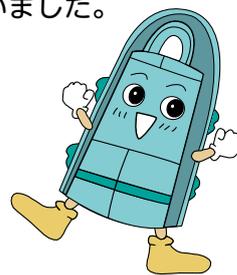
豊田市郷土資料館、近代の産業とくらし発見館は令和4年度をもって閉館します。閉館する2館の機能は新博物館に受け継がれ、これからも豊田市の歴史や文化を皆さんの記憶とともに守り伝えていきます。

豊田市内外にかかわらず、たくさんの方にご来館いただき誠にありがとうございました。



豊田市郷土資料館 閉館日 令和4年9月30日

近代の産業とくらし発見館 閉館日 令和5年3月31日



■豊田市郷土資料館利用案内■

開館時間 午前9時～午後5時
休館日 毎週月曜日（祝祭日は開館）
入館料 無料
交通案内 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分
名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分
愛知環状鉄道「新豊田駅」より 徒歩15分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ 徒歩5分
駐車場 約20台

●豊田市郷土資料館だより No.114 最終号

令和4年9月15日発行
編集・発行 豊田市郷土資料館
〒471-0079 豊田市陣中町1-21-2
TEL.0565-32-6561 FAX.0565-34-0095
E-mail● rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL● <http://www.toyota-rekihaku.com>

※豊田市郷土資料館だよりは、HPでもご覧いただけます。